

(要約)

# 近代から現代における彝族社会の変化と文化変容について の総合研究 ―涼山彝族を中心として―

清水 享

<論文目次>

序章 はじめに	1
1.彝族	1
2.涼山彝族	4
3.彝族研究	7
4.問題の所在	13
第1章 涼山彝族の葬・墓制 - 涼山彝族土語地域間の差異について	26
1.はじめに	26
2.彝族の葬・墓制の研究	27
3.明代以前の彝族の葬・墓制	29
4.清代以降の涼山彝族の葬・墓制	34
5.結語	80
第2章 涼山彝族土司阿都氏とその墓碑史料	97
1.はじめに	97
2.涼山彝族土司の墳墓	99
3.阿都土司墳墓の状況	101
4.阿都土司墓碑史料	102
5.墓誌史料から見た阿都土司について	104
6.結語	115
第3章 民国時代の涼山彝族土司「嶺光電」	124
1.はじめに	124
2.民国時代の涼山彝族についての先行研究	125
3.民国時代の涼山地方	127
4.煖帯田壩土千戸嶺氏	129
5.嶺光電の生い立ちと彝族へのまなざし	131
6.嶺光電による彝族の生活向上に関わる活動	134
7.嶺光電と彝族のネットワーク	144
8.結語	153
【附録1】〈嶺光電年譜〉	156
【附録2】〈嶺光電著作、翻訳〉	159

第4章 中央研究所蔵彝文文書と馬学良	170
1.はじめに	170
2.彝語と彝文字	171
3.彝文（僮僮文）文献	174
4.中央研究所歴史語言研究所蔵の中国非漢民族文書	175
5.傅斯年図書館の彝文（僮僮文）文書	176
6.中央研究院の彝文（僮僮文）文書の来歴について	186
7.馬学良と彝文（僮僮文）文書	194
8.結語	197
【附録1】中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館蔵彝文（僮僮文）文書一覧表	205
【附録2】中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館蔵彝文（僮僮文）文書図版	227
第5章 町に出るピモ - 宗教職能者の活動の場の移動 -	248
1.はじめに	248
2.「町に出るピモ」とは	249
3.ピモとスニ	251
4.町に出るピモ	257
5.結語	269
終章 おわりに	275
1.結論	275
2.今後の課題と展望	283

## 序章. 問題の所在

彝族は中国西南地方の雲南、貴州、四川の各省および広西チワン族自治区などに居住する。総人口は約 871 万人（2010 年）である。彝族は歴史的には「獯猓」、「夷人」などと呼ばれていた。そしてその彝族には多くのサブエスニックグループがある。彝族の言語である彝語はシナ・チベット語族、チベット・ビルマ語派、彝語群に属する。彝語には方言があり、その方言差は大きい。彝族には独自の文字があり、彝文字と呼ばれる。彝文字の起源には諸説あるが、年代が明確に判明する最古の彝文字は 1485 年の金石文である。彝文字文献はアニミズム的な宗教観を反映した経典などが多い。彝族は唐代には烏蛮と呼ばれ、南詔国建国には彝族が関わった。元代以降彝族地域は土司制度によって間接統治された。また地域によっては改土帰流もされた。一部の彝族地域では民国時代まで土司制度は継続された。

本論文では涼山彝族を中心に論を進める。涼山彝族とは四川省南西部の涼山地方とその周辺に居住する彝族であり、自らをノスと称している。その人口は約 180 万人（2000 年）である。言語は彝語の北方方言を操る。この北方方言はさらに 4 つの土語に分けられる。民国時代になってもこの土司制度は継続したが、ノホ（黒彝）階層勢力が強くな

り、父系出自集団である「家支」間の争いも増加した。民国時代の「家支」は武装化し、外部勢力を排除したため「独立僱傭」などとも呼ばれた。涼山彝族の社会は厳しい階層社会と父系出自集団「家支（ツヴィ、cyt vi）」を特徴とする。階層は5つからなる。土司の階層でもある「ツモ（nzy mop）」が最上位に位置し、次に黒彝である「ノホ（nuo hop）」が位置し、さらにこの2者が支配層をなす。その下に一般民である白彝の「チュホ（qu hox）」がいる。その下の層に「奴隸」とされる「アジャ（安家、pur jji）」がおり、最下層に「家内奴隸」の「ガシ（ga xy）」が位置する。ツモは人口の0.1%、ノホは6.9%、チュホは50%、アジャは33%、ガシは10%を占める。涼山彝族は他の地域の彝族よりも漢民族文化の影響が少ないとされ、そのため他地域では早くに見られなくなったものが現代まで保持されてきたといえる。

彝族の社会、文化についての研究、調査、分析は20世紀初頭から始められた。涼山地方など彝族地域では楊成志、馬長寿、林耀華、曲木蔵堯、莊学本、毛筠如やさまざまな団体や機関が調査研究を進めた。彝語、彝文字の研究では丁文江、馬学良の功績は大きい。1950年代からの「少数民族」に対して行なわれた社会歴史調査は彝族に対しても進められた。1980年代以降、謝劍の文化人類学的な研究をはじめ、序々に彝族研究も増えていった。歴史研究では彝族の通史を編纂する動きや彝族に関する档案史料集をまとめる動きも見られた。彝族近現代史では潘先林が彝族出身の龍雲などが形成した雲南省統治集団の研究がある。また彝族研究史が注目され李列や王菊による研究が見られた。また現在はさまざまな分野から彝族社会、文化の研究が進められ、学際的な彝族総合研究である「彝学」も提唱されている。

日本における彝族の研究は鳥居龍蔵を嚆矢とする。その後、南詔国や烏蛮の問題についての議論が活発になされた。西南地方の土司に関する研究も進められて、明清時代の彝族土司について、栗原悟、神戸輝夫、野本敬が論考を表した。清代の涼山地方の研究では菊池秀明がおり、歴史的な視点からの彝族社会研究には福本勝清がいる。彝族の神話、民間伝承および宗教信仰の研究も君島久子、櫻井龍彦、佐野賢治などいくつかの論考が見られる。彝語、彝文字の研究としては西田龍雄、小門典夫、岩佐一枝、福田和展の研究がある。

欧米人による彝族地域の調査研究も19世紀後半ごろから盛んになり、20世紀前半にまでに多くの調査報告や研究がなされた。代表的なものとしてはVial, Paul, Davis, H.R., D'Ollone, Goullat, Peterなどの調査や研究がある。1980年代以降は文化人類学、言語学を中心としてHarrell, Stevan, Mueggler, Erikなどの研究がある。

本論文は中国西南地方の彝族の社会の変化と文化の変容について考察する。特に近代から現代の彝族社会や文化の変容や変化についてその実態を把握しようとするものである。そして特に四川省涼山地方に住む彝族に焦点を当てて論を進めるものである。

これまでの彝族の歴史研究で重要視されたのは起源論など問題だった。これは現代中国の中における彝族の文化的な地位を模索することが出発点にあり、古い起源、民族文化の

優秀性を示すための研究であった。こうした議論は推論の部分が多く、実証的でない希望的観測で結論が導かれることもあった。また彝族の歴史研究では涼山彝族などの社会性質論争も盛んであった。これは彝族社会の社会発展段階論的位置づけをしようとするものであり、1980年代ごろまでは激しい論争が繰り広げられた。彝族歴史研究で史料や考古資料に基づいた実証的な研究の蓄積は次第に増えつつあるがまだそれは十分ではない。本論文では今まで焦点の当てられることの少なかった近代から現代にわたる涼山彝族の社会変化、文化の変容の諸問題について総合的かつ実証的に考察を進めるものである。

彝族文化の変容、変遷では涼山地方各地の葬制、墓制を取り上げ、これを丹念に検証する。葬制や墓制には世界観や宗教観が反映されており、文化の根本部分を示すものである。また彝族文化の変容として近代学問と彝語、彝文字、彝文文献の関わりを中央研究院に収集された彝文字文献資料の様相とその来歴から論じる。さらに彝族文化において「ピモ (bi box)」という宗教職能者についても重要な問題を含んでおり、特に現代史的な視点からその変容や変遷について論じる。

彝族社会の様相として彝族と漢民族の中間的な位置に存在していた土司であるズモに注目する。清代から近代へと、この涼山彝族の土司が残した漢文墓碑史料を手がかりに土司と彝族社会について論じる。さらに彝族土司については近代から現代へかけて「嶺光電」という個人に注目し、その実態をと彼の立場とその役割について解明する。

本論文は文献史学に拠った検証の方法のみならず、考古学的調査と分析の手法、民俗学的視点の援用、そして言語学分野まで視野を広げ、かつ文化人類学的フィールドワークの方法なども取り入れ、多角的な手法で論を展開する。観念的な研究が先行しがちな彝族歴史研究に一石を投じ、今まで十分に把握されなかった近代から現代へかけての研究の蓄積を進めるものである。

## 第1章 涼山彝族の葬・墓制 - 涼山彝族土語地域間の差異について

本章では涼山地方各地の葬制、墓制を取り上げ、これを検証し、その地域的な傾向や歴史的な変遷を明らかにした。はじめに漢文史料に見られる彝族およびその祖先とされる人々の葬・墓制である火葬の様相を振り返った。そして清代以降から現代へかけて涼山地方の葬・墓制について、4つの土語地域の様相を地域ごとに漢文文献資料、フィールドワークデータなどからこれを分析した。まず涼山地方の彝族の葬・墓制について全体的に把握することができた。そしてここで明らかになった差異と変容で重要なものには次のものがあった。それは火葬後の遺骨、遺灰の扱い方の差異だった。火葬後の遺骨、遺灰は山中の叢林や洞窟に散骨埋葬する例とその場に埋葬する例の2つの方法があった。山中の叢林や洞窟などに運ぶ形態は涼山地方の中心地域で行なわれている形態だった。そしてこうした方法がとられる要因の一つとして「冤家」の存在があり、それは死者の遺骨、遺灰に呪術を掛けられることを恐れたためであった。聖乍土語地域や義諾土語地域では民主改革以前、黒彝の各リネージの勢力が複雑に入り組み、争いも激しかったのである。そのため近代以

降この地域でこうした遺骨や遺灰の扱い方が広く行なわれていたことを確認することができた。祖霊はマドという位牌に納められていた竹の根を依り代としており、これを山中の洞窟に納めて祖神化するのであるが、その場が遺骨や遺灰の山中への埋葬の場と変化したことを改めて知りうることができた。さらには涼山彝族における漢文墓碑の墳墓についても分析した。そしてこれらはすべて土司のものであり、墳墓は土語地域の区分には関係なく漢文化と接する地域にあったことが明らかになった。そしてその形式は漢民族の影響を強く受けものであり、なかには「向天墳」という特殊な墳墓も作られたのである。この向天墳は彝漢折衷型の墳墓であり、そのあり方はまさに涼山彝族の漢文化の受容のプロセスの一端を示していた。

## 第2章 涼山彝族土司阿都氏とその墓碑史料

本章では涼山彝族土司の墓碑から涼山彝族土司の状況を考察した。これは彝族と漢民族の中間的な位置に存在した土司から彝族社会の様相を解明するものであった。清代から近代にかけて涼山彝族土司が残した墓碑の漢文史料を手がかりに分析を進めたのである。涼山地方で土司の墓碑の建てられた状況を整理し、19世紀の阿都土司の墓碑史料を中心にその内容を読み解いた。この19世紀の阿都土司の墓碑史料が残されたことによって当時の阿都土司の置かれていた状況を知りえたのである。特に同治年間の阿都土司の涼山彝族と漢族の間に位置し、涼山彝族の地域で起きていた混乱とそれへの対処と阿都土司の苦境について知見を得ることができた。さらには19世紀以前で不明確になっていた阿都土司の系譜を土司の漢語名と父子連名制の彝語名とを整理検証し、不明瞭だった系譜について明らかにした。さらには彝族として阿都氏の族源と、墓誌に漢文で見られる族源の違いについても言及した。

## 第3章 民国時代の涼山彝族土司「嶺光電」

本章では20世紀の涼山彝族土司「嶺光電」に注目して、その実態を解明した。嶺光電は土司であっただけでなく彝族の知識人として彝族社会や彝族の人々の地位の向上を目指す運動を進めていたことを検証した。そして涼山地方における土司としての内政改革と、涼山地方外の南京や重慶などでの地位向上を目指す活動を振り返ったのである。その原点は幼少のころに地方軍閥によって強制的に行なわれた改土帰流（改土帰劉）であった。嶺光電は涼山内外で積極的に活動したが、これがすべて一体の活動であることを指摘した。民国時代の嶺光電の土司としての内政改革は教育、衛生、アヘン禁止、産業振興など多方面で進められた。涼山地方以外での活動は西南夷族文化促進会、『新夷族』の刊行、西南夷苗土司民衆代表聯合駐京辦事処設立請願運動、西康夷族聯誼会などがあつた。これにより各地の彝族とその他の非漢民族の連携がなされ、その非漢民族連携の動きの中で嶺光電が独自の活動に変化していったことも分かった。その後、嶺光電は立法委員に選出されるなど、その活動の場を広げていく中で涼山地方の「解放」を迎えたのであつた。

#### 第4章 中央研究所蔵彝文文書と馬学良

本章では近代学問が彝族文化を支えた彝族の言語、文字、文献とどのように関わっていたのか、中央研究院に収集された彝文字文献資料の様相とその来歴から考察した。そしてこれらの文書が彝語南部方言地域の文書と彝語東部方言地域、彝語北部方言地域、彝語東南部方言地域の文書であることなどの知見を得た。さらにはこれらの文書の内容や来歴についても分析を進めた。そして彝語南部方言地域の文献は紅河州樂育郷や元江州洼垵郷付近のピモが所有していたものであり、1940年代に南開大学边疆研究室の邢慶蘭が収集した可能性が高いことが明らかになったのである。『ングジシェジョ（艾簡申覚）』という文書は南部方言地域でも珍しい木版本であり、孤本として現在唯一残されている文書であるということも判明したのである。また彝語東部方言地域、彝語北部方言地域の文書は馬学良が収集したものであることも確認できた。馬学良が雲南省武定県などで現地調査を行なった状況から文書の来歴やその当時の様相についても明らかになった。そしてこれらの文書には馬学良自身が書き写したのも少なくなかったことも判明した。さらに北部方言地域の文書は本来義諾土語方言地域にあった文書であることも明らかになった。さらには東部方言地域の文書には明代の木版本である『勸善書』も含まれていたことも分かったのである。

#### 第5章 町に出るピモ - 宗教職能者の活動の場の移動 -

本章では彝族のピモという宗教職能者の変容や変遷について検証を試みた。ピモの流派やその活動の状況を全体的に捉え直した。ピモは1950年代までは農村で主に活動していた。その後、文化大革命中を迎えるとピモは地下に潜り、ひそかに活動を続けたのである。そして改革開放政策以降、次第に広く活動し始めた。そして「町に出るピモ」が現れたのである。町で生活する（县城住まい）多くのピモが見られるようになって来た。なかにはさらに携帯電話など使用し、活動の場を広げているピモも現れた。またピモの活動やピモが書き残した彝文經典に対して文化的な価値が認められ、公的な機関で文化保護の活動をするピモも現れた。こうしたなか、最も注目されるのが街頭に露店を出し、占い、厄払い、病気治療儀礼などをするピモあるいはスニの出現であった。彝族文化の研究者から見ると、このピモは「真正」でなく「偽」であると認識され、研究の対象とさえされていなかったのである。しかし実際に調査分析を進めるとこのような露店のピモも一般の人たちからは信頼を得ていることが明らかになった。また西昌では漢族の「算命先生（占い師）」と露店を並べ、漢方薬剤を販売する露店や民間療法の露店とともに民間療法の複合的なマーケットを形成している状況も現れていた。こうしたことは彝族のピモが未だ医療の方面で活用され、活動していることを示していた。現代史の中のピモの活動の変化を振り返ると、その活動の場が大きく変化し、それまであまり変化がないと考えられていたピモも大きく変化したことが明らかとなった。

## 終章 おわりに

本論文は近代から現代にかけて涼山彝族を中心としてその社会の変化や文化の変容を総合的に考察した。文化的な側面として彝族の葬制、墓制の形態の地域的な差異やその変遷およびその原因を考察した。また民国時代に中央研究院によって収集された彝文文書とその収集の来歴から、こうした知られざる彝文文書の実態および近代学問と彝文文書の関係を検証した。そしてピモの置かれていた状況を現代史のなかからその変遷と文化変容について分析を加えた。社会的な側面として阿都土司の墓碑史料から 19 世紀以降の涼山彝族土司の状況を捉え直し、20 世紀の涼山彝族土司「嶺光電」という人物から涼山彝族における改革運動や涼山彝族と外部の関係を分析した。

彝族の近代から現代における文化の変容、社会の変化は現在ようやくその研究の重要性が問われるようになってきたところであり、未だ空白の部分が多い。本論文ではこうした学問的状况に先んじて、このような空白部分について複眼的なアプローチをもって、総合的かつ実証的に明らかにした。

彝族の文化や社会も近代から現代にかけて、比較的短い時代的なスパンで絶えず外部との関係のなかで変化し、あるいは内部の論理によって変容を見せるなどしていたのである。それは本論文で分析した彝族の墓制や葬制の差異や変容、墓碑史料から見える近代を迎える阿都土司の様相、近代彝族土司「嶺光電」が行なった近代化や彝族の地位向上の運動の知見、近代学問と未解明だった彝文文書の分析、現代史のなかでピモの文化的な変容の実態などからも見て取ることができたのである。そして知られざる彝族の文化的事象、社会的事象の変容、変化を総合的かつ実証的に検証し、その歴史に光を当てたのである。そして本論文の彝族の近現代史研究はそれまでの中国史や東洋史にはなかった視点の方向性を示したといえる。それはすなわち非漢民族がただ単に漢民族の周辺に位置し、漢民族の文化や社会に付随し、影響を受けるだけの存在として研究されるものではなく、その非漢民族からも実証的に研究できる可能性を示した。彝族の文化や社会の変化、変容を実証的かつ総合的に研究を進めることは東洋史のなかで、非漢民族研究の新しい視座を示したのである。

さらに多角的視点からの総合的な手法を用いた歴史研究は中国の非漢民族歴史研究でも見られない。本論文のような総合的な歴史研究の手法は、歴史学だけでなく文化人類学研究において、歴史学の研究方法の援用や文献資料から得られる知見の重要性を示した。そしてそれは広く学際的研究の橋渡しとなる可能性を示しているといえる。

彝族の近代から現代へかけての文化変容や社会の変化に対する研究の課題はまだ多い。まず彝族の近代から現代へかけた歴史研究そのものがまだまだ少ないことが第一に挙げられ、その蓄積の重要性を指摘しなければいけない。そしてまた本論文の各章のテーマについても多くの課題が残る。

第 1 章では彝族の葬・墓制に関しては、さらに広範な史料や事例報告の蓄積が必要と

なる。またその背景にある人々の生活、習慣、社会との関わりから多角的な比較検討もなされなければならない。第2章では阿都土司を墓碑史料から考察したのだが、他の土司の墓碑史料との比較、そして土司とそのネットワークも含めて考察し、近代へ向う土司がどのように立ち振る舞ったのか、検証していかなければいけない。また知られていない家譜などの史料の発掘も進めなければいけない。第3章では嶺光電という人物に焦点を当てたが、民国時代には嶺光電以外にも涼山地方には複数の土司がおり、そうした土司間の繋がりが近代を迎えるなかでどのように変化したのか検討しなければいけない。また嶺光電の1950年代以降の活動の実態についても注目される課題である。第4章では中央研究院傅斯年図書館所蔵の彝文（僮文）文書において、その内容が不明であった文書を中心として分析考察を試みたが、その彝文（僮文）文書の全貌を解明したわけではなく、今後も同図書館所蔵の彝文（僮文）文書の全面的な研究考察を進めなければいけない。また近代以降の彝文（僮文）の置かれていた状況と近代学問のかかわりを全体的に分析していかなければいけない。第5章では現代史におけるピモの変遷について考察したが、より広範な地域での調査やピモの状況の全体的な把握とピモの活動の変化などの詳細を丁寧に分析しなければいけない。特に「趕集（マーケット）」におけるピモの状況の把握は重要である。さらには医療との関係もより注目しなければいけない。

この他に近代から現代にかけての涼山地方の彝族の文化や社会について、注目される課題は多い。20世紀前半の涼山彝族の実態把握もそうだが、1950年代の「民主改革」、民国時代「寧属省」建省運動、ラックの取引など注目される課題であるといえよう。また彝文史料の発掘と活用の方法も課題である。

地道なフィールドワークと広範囲な史料調査によってさらに綿密な彝族社会と文化の分析考察を進め、それによってはじめて彝族の近代から現代における彝族の文化の変容と社会の変化を全体論的に捉えることができるといえよう。